

Title	慶應義塾一貫教育制度の成立：福沢の生と死とをめぐって
Sub Title	A critical history of the forty-four years (1858-1901) of Keio Gijuku, the corporate school
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1974
Jtitle	哲學 No.62 (1974. 3) ,p.289- 308
JaLC DOI	
Abstract	For these forty-four years, Keio Gijuku experienced four crises, of which the first one was of learning tradition, the second of school finance, or income and expence, the third of special subjects of study, and the fourth of system of education. Keio Gijuku was the corporate school, which was incorporated with the young scholars who had the aim to learn the Western sciences. The members of the school co-operated to break the crises, which otherwise would have forced the school to close. In the last year (1901) of the critical history of the school, the chief member of the corporation, Yukichi Fukuzawa died, but the foundation was rather safe and remained unmoved during the following forty years after his death.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000062-0289">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000062-0289</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 慶應義塾一貫教育制度の成立

——福沢の生と死とをめぐって——

中 山 一 義

今年、昭和48年は普通部が中学校として発足して75年、来年は幼稚舎がスタートして百年だということで、それぞれお祝をする。普通部はすでに10月の中旬、数日にわたって祝賀行事があつて、わたしは18日に、普通部の体育館で、普通部が生まれるまでの歴史を、中学生にもわかるように話をした。来年2月5日には、幼稚舎の先生に、一貫教育の成り立ちについて話をする約束をしている。面白く聞いてもらえるような話をしたいと苦心している。この一文はその時の話の講案のようなものである。

わたしが慶應義塾の歴史を研究しはじめて30余年になる。その間、考えがいろいろ変つた。絶えず調べをつづけていると、考えというものは、刻々に変わるものである。学問というものは、そうしたもので、そこに進歩がある。そのつもりで聞いて下さい。疑問があれば、遠慮なく質問して下さい。

本題を二つに分けてみる。一つは、慶應義塾はどのようにして生まれたか。もう一つは、その後どんな成長をしたか。そうして、この二つを通じて、一貫教育の制度が、どのようにして生まれたか、お話したいと思う。

### a 慶應義塾の誕生

歴史事象は、いろいろな条件がからみ合い、遠因近因がさまざまに働き合つて出現する。

歴史は史料なしでは書けない、すなわち、史料に即して書くのだが、しかし史料だけ山と積んでも、歴史にならない。プラス・アルファが必要で

ある。それは何か、人間に対する愛情と洞察である。これがないと、歴史の事実は並べられても、真実は描けない。だから、歴史は単なる科学ではない。それ以上のものである。何とも、むずかしいものである。

### (1) 長崎・大阪での蘭学修業

福沢諭吉が、兄三之助のすすめで、長崎遊学を決意したのは、安政元年(1854)、和親条約がアメリカその他の国々と結ばれた年である。後代のわれわれから見ると、象徴的である。わが国最大の洋学者が誕生する機縁が、ここに成立し、わが国も永年の鎖国の一角が崩れ、全面開国は時間の問題となったからである。それにしても、弟諭吉に蘭学修学をすすめた兄三之助の時代感覚のするどさと、決断力のつよさに敬意を表したい。諭吉はむしろ受身で、後年、当時の心中を追懐し、二つのことを告白している。一つは、その時自分は、窮屈な中津を出たくてたまらず、その口実になるなら、蘭学でも何でもよかったといい、もう一つは、蘭学修業はすこぶる難事業だが、お前にやる気があるか、と兄にいわれて、漢学学習で自分の力量に自信があったので、難事業ならやりがいがあると思い決意をしたといい、恐らくそれは徳川時代の武士の、永年にわたって培った武士気質が、自分のうちにもあって、決意させたのであろう、と語っている。

長崎に在ること一年、やむをえない事情でそこを去ることになり、自分では江戸遊学を志し、大阪在勤中の兄の許に立ち寄ったところ、この際もまた、大阪にもよい先生はいる、自分の眼のとどくところで勉学せよ、という兄の忠告で、緒方塾に入門することになり、ここに洪庵との結縁が成立する。このように、生涯の重大な転期に、再度にわたり、兄の意に従っていることは、見逃しえないことであり、その後の福沢の動きと照し合わせて、おもしろいことだと思う。

ところが、翌安政3年兄の急死に遭い、帰郷して家督をつぎ、郷里に在って、遠く大阪再遊を思いつづけた二カ月ほどの間の苦しい心中には、何としても一人前の洋学者たらんという願望が燃えたぎっていた。晩年に福

沢は「自伝」の中で、一生の間に三度誓願を起したが、第一の誓願は洋学を修めて、人に不義理をせず、頭を下げぬようにして、衣食さえできれば大願成就、ということであったと述べているが、少年福沢の心の中がしのばれて、おもしろい。藩の許可も下り、母も承諾し、家財を整理し、借金を済まし、母と幼ない姪の二人を残して、背水の決意で、また緒方塾に舞いもどって、勉強をつづけた。翌安政4年には塾長となり、塾生の世話などしているうちに、福沢の学力は進んで、自信もできたらしい。そういう福沢のところへ、翌安政5年冬、江戸の藩邸から招命が来た。

## (2) 江戸藩邸内に蘭学家塾を開く

江戸からの藩命は、藩の若者に蘭学を学ばせたい、ついてはお前を蘭学教師に雇うから、出府勤番せよ、というのであった、と「自伝」に書いてある。だから、開塾は福沢自身の意志ではなく、受身であり、最近発見された出府の翌年あたりの手紙には、当分こしかけのつもりで蘭学のお雇い教師をしていると友人に報じている。

安政5年は、対外関係が急転回した年で、井伊大老が勅許をまたず、独断で通商条約をアメリカその他と締結し、横浜その他数港を開く約束をした。そこには無理があり、強要が感じられる。このような時代を背景に開塾した蘭学塾は幕末十年間、遂に正式な名称をもたなかったといわれている。だから、われわれ研究者はこれを福沢塾と呼んで取扱っているが、幕末英学塾になった慶応年間でも藩邸内では「蘭学所」で通り、表紙に「不可無堂」という堂号が記入された冊子もあるが、どれも正式のものではない。塾の性格も福沢の私塾ではあるが、設立の事情からも察せられるように、塾舎は勿論、福沢の身分その他いろいろな点で藩に依存するヒモ付き学校だった。

一口に鉄砲州時代と呼ばれているこの時期に、福沢は、蘭学から英学への転向、三度の外国行、結婚で文久年間一時新銭座へ移転、幕府外国方へ雇、次いで出仕、こういう一連のことがらを考え合わせると、福沢自身の

身柄も落着かず、内外の政情の不安定が反映し、塾生の出入りもはげしく、風紀も乱雑で、教科書も勉強法も整わず、われわれ研究者にとって、おもしろい代りに、まことにつかまえてどころのない時期である。しかし、見方を換えると、この頃こそ、慶応義塾の原点の、そのまた原点として、活力に満ちあふれていた時代のように思われる。

文久3年(1863)の秋、福沢塾は新銭座の新婚の住居を去って、再び鉄砲州にもどった。参観交代制の廃止で、邸内に空屋がふえ、それが借りられたからである。生徒も、これからはたくさん収容できる。この時から維新までの四年間、福沢は藩からの独立を真剣に考え、次々にその準備をして行ったようである。

事を成すに、ひとりではできない。人手は欠かせない。福沢はまず、<sup>なかま</sup>仲間作りに着手し、翌元治元年中津に帰省、小幡篤次郎他6名の若者を江戸へつれてきた。これが後に慶応義塾の人的構成の中核となった。次は資金作り。事を成すに、先立つものは金である。慶応年間に入ると、文久のころとちがい、攘夷の勢もはげしさを減じた。『西洋事情』初篇3巻の出版は、旱天に慈雨で、次いで著訳した書も、大いに売れ、独立の資金ができた。

いつから福沢は、他人の忠告や命令によらず、自分の意志で自分の運命を切り拓くようになったか、これは興味ある問題である。

江戸へ出た翌年、安政6年(1859)、新開地横浜見物から、英学への転向を決意したり、そのまた翌年、万延元年、咸臨丸渡航の際、使節木村摂津守に単身頼み込んだりしているのを見ると、すでに自主的に動きはじめていることがわかる。

しかし、何ととっても、三度にわたる欧米実地見学が、福沢を、その人物・識見・学問において、変身させた力は大い。これをわたしは福沢の洋学開眼と呼ぶ。万延の第一回米国行では、驚嘆の洗礼を受けた。文久の欧州行は、西洋文明の由来と仕組と本質とに対して、福沢の眼を開かせた。慶応の二度目の米国行では、たくさんの教科書を購入して帰り、維新後慶

応義塾の教育を充実させ、活力を与えた。ここにおいて、福沢の西洋認識は単に一介の洋学者以上のものに高まった。洋学で飯が食えれば大願成就という域を超えていった。福沢は第二の誓願を起した。西洋文明を摂取し、以て日本を独立の安きにおくことを期した。福沢にとって、日本の独立が目的で、文明はこれに達する手段となった。福沢の眼には、西洋文明は、科学と独立心との二本立てとして写った。この二つを国民にうえつけて、封建の古習の惑溺から救い出す仕事は、勇気を要することであると、福沢は自覚した。啓蒙は学者にとって単に知恵の問題ではなく、勇気の問題であると悟った。福沢は、自分の持っている資本、一本の筆と一枚の舌とで、この仕事を引き受ける決意をし、著訳に、教育に活躍した。この時福沢は一介の洋学者以上のものであった。

### (3) 慶応義塾の誕生

同志もでき、金もでき、何をいかにすべきかが定まれば、勇気をもって、断行するのみ。あとはチャンスをつまみ取りであった。維新の戦争を背景に、福沢塾は生れかわり、慶応義塾となった。

見方によっては、維新戦争はチャンスであった。一小家塾にとっては、小さなことでも、思いもよらぬことが、むしろ、幸福に結びついた。藩邸上知の幕命で、やむなくせねばならぬ引越しが、藩のヒモを断ち切って、独立するふん切りをつけさせてくれた。江戸が戦場になりそうだというので、大工の手間賃が下ったので、塾舎の構築費が安上りですんだ。更に心配していた戦乱が大したこともなく、江戸は戦場にならずじまいで、思い切って建てた塾舎が灰にならず助かった。江戸市中の戦雲も収まって市民が落ち着きをとりもどし、気が着くと、芝新銭座のもと有馬屋敷の空地だったところに、慶応義塾という名の、塾生百人も収容する私学ができていて、上野の戦争の日も、授業を休まなかった、と知って人々は驚いた。

慶応4年<sup>(9月改元、明)</sup><sub>(治元年1868年)</sub>4月に開講したこの学校は、西洋の学問を学ぼうと集った同志の結社の社中協力によって建営される独立の私学である。学校

の規模は英国のパブリック・スクールを模ね、時間割は全く西洋式に七曜制と洋時制、教科書は前年米国から購入したものを用い、教授陣は福沢を筆頭に、鉄砲州時代の俊秀数人が名をつらね、入社、塾中などの諸規則は社中相談の上とり定め、読書学習の方法順序も明示され、当時の江戸のどの学校でも、ちょっと模ねのできぬほど整ったものであった。

その年の9月頃印刷された木版のパンフレット「芝新銭座慶応義塾之記」は20頁たらずの小冊子であるが、当時の模様を手にとるように知ることができる。このパンフレットの中で、福沢は近世洋学百年の歴史を回顧し、先人の苦心の跡を偲ぶとともに、その学恩に感謝し、その学統を受け継ぐ者の自信と使命感とを披瀝している。福沢はさらに進んで、洋学の本質を明らかにし、西洋の学問は、国民の幸福に欠くべからざるものであることを説いて、志あるものの勉学を勧めている。

## b その後の成長を追って

「窮則変、変則通、通則久」これは、周易繫辭伝下にある有名な文である。その後の慶応義塾の歴史をみると、10年に一度の割で危機に遭遇し、その都度、なんとか切り抜けて、前進してきている。おもしろいことに、よくみると、窮して変じはするが、変じながらも、変ぜざるものを伝統しつつ、生命を持続してきている。変化のうちにも、不変のものを存して、成長をつづけている、その歴史の跡をたどってみよう。そして、慶応塾塾に一貫教育の制度の成立する経緯を明らかにしてみたい。

### (1) 維新戦争—文明の危機

福沢は「自伝」の中で、維新のころ、日本の独立を心配し、その危機感から、やがて絶望感におちいり、子供をヤソの坊主にしようとまで考えたことを告白している。外に開国を装い、内心攘夷を抱いている幕府には、信頼ができず、これに対し、勤皇討幕に狂奔する者は、単なる乱暴人と見ていたから、東西南北いずこを見ても、寄るべなく、頼りない政情に、国

の独立の危機を憂えている。生れつき、青雲の志など持ち合わさず、政治社会には向かぬ自分に、残された活路は、国民の啓蒙の仕事に挺身することのみと観念し、これに将来を賭け、これこそ、国を救う唯一の道であり、自分に課された使命なりと考え、前述のように、これを第二の誓願として勇気を以て実行する決意をしている。

そういうわけで、維新の革命戦争を、政権の争奪と見、そこに文明の危機を感じていた福沢は、いわゆる官軍にも賊軍にも、味方できないので、どこまでも中立的態度を守った。

前記「芝新銭座慶応義塾之記」所収の「中元祝酒之記」という、字数にして1千字ばかりの文章を見ると、そこに、戦争をよそに、書を読むものの立場とその主張とが述べてある。それは、春以来の戦乱にも、無事生存し得たことを、互に喜ぶとともに、自分たちの手で、革命の世にあって、学問の命脈を守り抜くことができ、文運の地に墜ちなかったことを祝う祝い文である。日本中、骨肉知友が勤皇佐幕の二派に分れて、相戦っているのをよそに、他日世に役立つことを期して、超然学問に勉めている自分の立場を弁護している。このような内容の文章を、敢えて印刷して、広く世に問う勇氣には、驚くほかはない。

戦乱がやみ、やがて平和が訪れたが、官学いまだ整わず、文部いまだおこらぬ時、慶応義塾が、国民啓蒙の仕事を一より占めしたのは当然のことであった。この勢は、その後も当分は続いた。福沢は『学問のすすめ』に、『文明論の概略』に、国民啓蒙（日本人のアタマをデングリ返すこと）の真義とその方策とを示し、私立の学者の職分が、ここに存することを強調し、みずからその先頭に立って、模範を示すものであることを宣言している。その自信と勇氣には驚くほかはない。

明治4—5年、政府の助成で、特に岩倉の口ききで、三田の土地建物が払い下げになり慶応義塾の所有になった。新銭座の四百坪から、一躍一万二千坪と三十倍にふくれあがった。これが慶応義塾と福沢との、その後の



慶應義塾社中之約束

一 東京三田二町目慶應義塾、慶應年中芝新築ニ設ケシ塾ヲ移シタルモノナリ其地面ハモト福澤諭吉ノ名ヲ以テ官ニ借り其時モ私塾ヲ開キ生徒ヲ教ルガ爲メトテ官ヨリコレヲ賃渡シ建物ハ塾ノ有金並ニ塾ノ名ヲ以テ借タル金ヲ出シテ買受ケ尙此度右ノ地面ヲ買フニモ塾ノ金ヲ拂ヒタルモノナレバ福澤氏ノ私有ニアラス社中公同ノ有ニシテ法ヲ立テ法ヲ行ハレシムルモノ其地位ニ居テ其事ヲ執ルノ間之ヲ管轄スルナリ故ニ社中ノ人ハ此塾ヲ三田二町目ノ學問堂ト唱フ可シ

一 我義塾學問法ハ博ク洋書ヲ讀ミ或ハ其父ヲ講シテ人ニ傳ヘ或ハ之ヲ翻譯シテ世ニ示スノミニテ心ヲ以テ心ニ傳フルノ奥義アルニ非ザレバ人ノ才不才ニヨリ今日人ニ學フモ明日又却テ其人ニ教ルコ

トアリ故ニ師弟ノカヲ定メズ教ル者モ學フ者モ限シテコレヲ社中ト唱フルナリ

一 社中教ル者ヲ教授ノ員或ハ教授方ト唱ヘ學フ者ヲ生徒ト唱フ故ニ一名ノ人ニテ此学科ヲ學テ彼ノ学科ヲ教ル者ハ一方ヨリ見レハ生徒ニシテ一方ヨリ見レバ教授方ナリ

一 社中ノ諸務ヲ司ル者ヲ執事ト名ク執事ノ職ハ文學ニ関ラザルガ故ニ教授ノ員ニテ執事タル者ハ二職ヲ兼ル者ト心得ベシ

一 執事タルモノ過半ノ同意ヲ以テ執事ノ員ヲ増減ス可シ

一 翻譯書ヲ上ホスルモノ慶應義塾同社等ノ文字ヲ記サントスルキハ必ス其草稿ヲ執事一見ノ上差支ナキモノハ之ヲ許ス若シ然ラズシテ私ニ此文字ヲ用ルモノアラバ社中ニテモ社外ニテモ談ジテコレヲ削ラシム可シ

活動の基盤となった。「文部省は竹橋にあり、文部卿は三田にあり」という世評は、その頃のことである。

三田に移って、「慶応義塾社中之約束」という30頁たらずの木版印刷のパンフレットができた。社中組織を成文化した最初であり、慶応義塾を構成するすべてのものの原像をその中に見い出すことができ、現在読んで、興味深いばかりでなく、将来のことを考えるのに色々役立つ。30年ばかり前、東京帝国大学の入沢宗寿という教授がこれを読んで、わたしに、仏教の「僧伽（そうぎゃ）」に似ていると言われた。わたしはその評言を、その時意外に思っただけで大して気にとめなかったが、頭の片隅に残っていたと見えて、数年前から、気になり出して、「社中之約束」と「僧伽」とを比較し、今日では両者の異同に限りない興味を覚えている。いずれ近いうちに、調べた結果を公表したいと思っている。そっくり同じでは勿論ない。異るところも多々あり、異は異で参考になる。しかし似ているところも多い。例えば、仏法僧の三宝は、福沢とその思想と社中に相応する。祇園精舎の建物は物持ちの寄付であり、三田の土地建物は政府の助成である。異同を比較することによって現在・将来を考えるのに、大いに役に立つようである。

別掲の写真版は、明治5年版「慶応義塾社中之約束」の前文である。慶応義塾の原像を知って、将来のことを構想するのに役に立つ。幼稚舎がスタートしたのはこのころである。文明教育は、幼少期からはじめなければならぬと認めたからである。発音を正す教授法を正則と見る世間の考え方に対して、福沢は洋学学習の順序を正すのを正則とみた。現在でも再考する必要がある。

## (2) 西南戦争前後—経済上の危機

「文部卿は三田にあり」という世評は、いつまでも続かなかった。明治4年の廃藩の余響と、士族の家禄処分のこととが進行するにつれて、私学の経済的基盤を侵害しはじめた。それをいち早く察知した福沢は、明治9年、

「慶応義塾改革之議案」を発表して、外部からの寄付や助成を当てにせず、明治初年以来の社中協力という一種の自給自足体制の補強の必要を説いた。近づきつつある危機を予知し、その対策を予示しているのだ。

この福沢の先見は、不幸にして的中し、明治10年の西南の役という形で、突発的に私学の経済を脅かした。戦中戦後に慶応義塾を襲った、入社生と収入の激減が、明治10年、11年、12年と三年連続したために、慶応義塾の会計は危殆に瀕した。

この危機を打開するために、福沢のとった方策は、借金策であった。福沢の持論は、政府や金持は金を出し、民間の有識者、即ち知恵のある者は知恵を出して共立の学校を建てるのが望ましい、というのであった。官の学校は、政変に左右され易く、役人根性は、もともと人間教育には不向きであると考えた。民間の知恵者も、野にある時は良いが、官途につくと、人間が変わって悪くなる。お役所という所は、衆知を集めて愚を行う所である、と言った。国民の真の啓蒙には、官の学校は向かない。金のある官が金を出し、知恵ある民間有志が知恵を出して作る、公私協力の学校が良いというのが、福沢の持論であった。至る所で、福沢はこの考えを述べている。

そういうわけで、一、二の旧大名や政府に借金を申し込んだ。そのいきさつは省略し、前後半年以上にわたる福沢の努力は、全て空しく無駄骨折りに終った。それには、双方に誤解と無理解とがあったようである。旧大名や政府は、福沢の真意を理解できず、福沢は金が無いわけではないのだから、それを出すべきだと考えたらしい。福沢はまた福沢で、慶応義塾は単なる福沢個人の所有物ではなく、社中公有のものであるから、福沢家の家計と、慶応義塾の会計との間には、はじめからはっきり一線を引いて、福沢の寄付という名目でつぎこんだものは、もはや慶応のもので、福沢のものではない、借金は福沢がするのではなく、慶応義塾がするのだ、ということ、金持や政府についに理解させることが出来なかった。八方手を

尽した福沢の努力にも拘わらず、また福沢の筆力や弁舌をもってしても、この道理を、金持や政府者にわからせることはできなかった。政府者数名に、別々にあてた最後の数通の手紙の中で、三菱（商船）や、伊勢勝（靴製造）への政府助成を引合いに出して、船士を作るのに金を出し、学士をつくるのに金を出さない法はない、靴をつくるのに出して、人をつくるに出さないのは不合理だ、彼等と平等に扱ってほしい、自分だけ継子扱いは不本意であると、政府の助成策の偏頗を難じている。

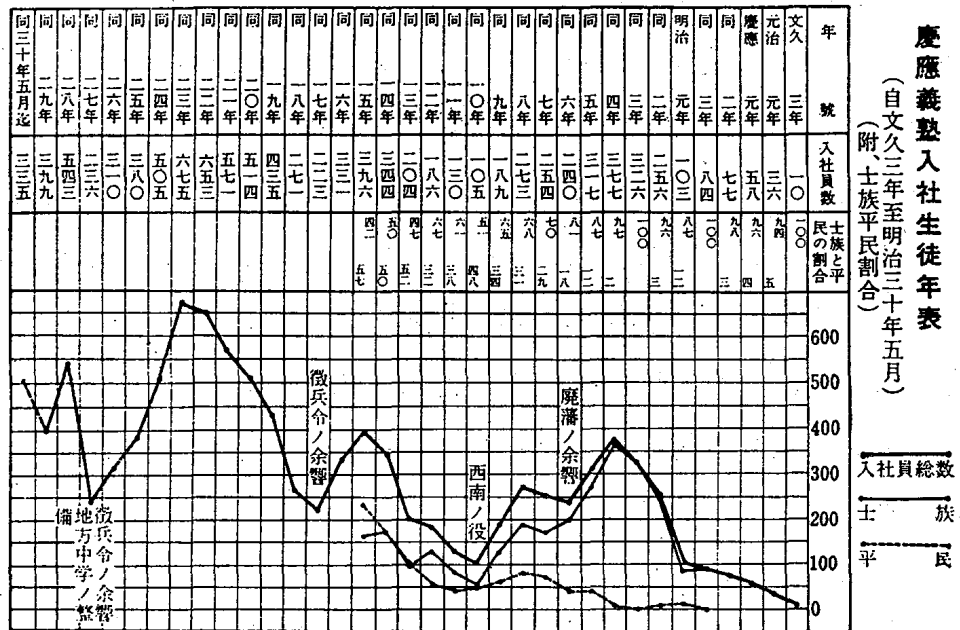
全ての努力が水泡に帰したことを知った福沢は、最長老の小幡篤次郎を招いて、廃塾の意のあることを洩らした。その間のことは、塾長浜野定四郎宛の手紙に詳しい。やがて、福沢の存意を知った社中の面々が驚いたのも無理はない。慶応義塾は福沢ひとりのものではない、社中共同のものだ、福沢がやめるといってもやめさせない、と理屈をこねて力んでも、打開の知恵と金とが出なければ、話にならぬ。鳩首談合が重ねられた一方、福沢は、自分はやめたくてやめると言っているのではなく、良き存続の法があれば聞きたい、君たちによき知恵があれば出して見ろ、といって、社中に下駄をあずけた形になった。

そこで相談の結果、明治13年11月にできたのが、「慶応義塾維持法案」で、文章は、福沢の手がはいっているらしいが、福沢の署名はなく、小幡他数名の社中有志が名を連ねている。維持社中から応分の寄付金を集め、これを維持資金として、維持存続を計ろうというものであった。次いで14年1月、「仮憲法」ができ、理事委員20名程を選んで、これに経営を委嘱するというものであった。この時、4万円ほどの応募があつて、一時危機を乗り切った。

窮すれば通ずると言われるように、これらの対策が打たれたのち、世間の景気は必ずしもよくなっていないのに、不思議にも、明治14、5年頃から、入社生が増加しはじめた。これは如何な事か。地方有志の好学心が目覚めて、平民出身の子弟の入社希望が増加してきたからであった。慶応

慶應義塾入社生徒年表

(自文久三年至明治三十年五月)  
(附、士族平民割合)



此入社ノ事ニ付キ、注目ス可キハ、華士族ト平民ト、其数ノ割合、及ビ時勢ニ從テ其割合ノ變化シタル事ナリ。我國ノ洋学ハ、元ト、医家ヨリ入りシ者ニテ、嘉永癸丑（註六年）亜国人ノ渡来前ニ、洋書ヲ講ズル者トテハ、唯医書生ノミナリシモノガ、安政ノ初ヨリ、尋常ノ士族ニテモ、往々斯道ニ志ヲ立ル者ヲ出シタルハ、時勢ノ一變革ナリト云フ可シ。左レドモ、尚士族ニ限リテ、百姓町人ハ之ヲ知ラズ。文久三年ヨリ明治四年マデ、本塾入社生ノ全数千三百二十九名ノ内ニ、平民ハ僅ニ四十名ノミ。翌明治五年ニハ、入社三百十七名ニシテ、平民ノ就学スル者漸ク増加シテ、全数百分ノ十二分ニ当ル、即チ士族八十八名ニ付、平民十二名ノ割合ナリ。同六年ニハ、増シテ十八分ト為リ、同七年ニハ、二十九分ト為リ、同八年ニハ、三十一分ト為リ、同九年ニハ、三十四分ト為リ、同十年ニハ、四十八分ト為リ、同十一年ハ、更ニ減ジテ三十八分ト為リ、同十二年ニハ、三十二分ト為リ、同十三年ニハ、上テ五十二分ト為リテ、平民ノ数、士族ニ超過シ、同十四年ニハ、正シク五十分ト五十分ト相平均シ、同十五年ハ、開塾以來、入社ノ数モ最モ多キ年ニシテ、平民ハ、百中五十七分ノ割合ニ上リタリ。以上二十年間、入社ノ増減及其平民ト士族ト割合ノ變化ニ就テハ、様々原因モアル事ナラント雖ドモ、明治十年ニ限リ、平民ノ数多クシテ、士族ノ少ナカリシハ、同年西南戦争ニ、自カラ士族ノ心ヲ動搖セシメタルガ故ナラン。又明治十三年ヨリ、頓ニ平民ヲ増シタルハ、全国農家ノ、富実ヲ致シタルガ為ニ、自カラ其文思ヲ発達シタルモノナラン。一私塾ノ盛衰、以テ天下全面ノ形勢ヲトス可キニ非ザルモ、自カラ其一斑ヲ窺フ可キモノアルガ如シ。（『慶應義塾紀事』明治十六年版）

義塾の社中の構成が、士族と平民との比率において変化をきたしているのであった。（別表参照）

### (3) 専門学の要請—学問の危機

ひとたび通じれば、あとはいつまでも安んじていられるかという、そうはいかないのが、歴史の常である。当分は生き延びられるが、やがて再び窮するのが、自然界人間界に共通の理法である。

明治11、2年の経済上の危機を切り抜けて、ホッと一息ついたかと思うと、19年ころから、学問上の危機を意識せねばならなくなる。いや、見方によっては、この事態は、すでに十年代のはじめから、はじまっていて、末になって窮まったのである。

明治10年、官立の東京大学ができた。維新後、旧幕府の開成所と医学所とを、明治政府が引き継いで、その後いろいろ変遷を経て、近代化され、専門の学問を整えて、ここに大学の体裁をとって出発したのである。官の金をつぎ込んでの仕事であって、私学の慶応義塾がちょうど存亡の危機に見舞われて、四苦八苦していたところに、盛容を誇っていたのである。両者を同じ土俵にのせて比べれば、大関と序の口との相違であった。

さらに、十年代半になると、社会の諸方面で、専門学の必要が感じられてきた。そうして、その要求にこたえて、専門学の学校が生れはじめた。その中で明治十年代半ころから、法律学校と呼ばれたもの、すなわち、現在の早稲田、明治、法政、中央その他の前身ともいうべき、十校近い学校がつぎつぎにできた。自由民権論とその運動の横行する世相と、近い将来に憲法を作り、国会を開こうという時勢が、これらの学校の母胎であった。二十年前後のある時期に、帝国大学の総長が、これらの学校の卒業生の資格等につき、監督したことがあった。

慶応義塾が終始これらの学校から特立していたのは、そのころまでの義塾の学問の性質が専門学でなく、教養学であったからである。明治の初年には、西洋の中学程度の教科書を読んでいたが、十年代の末ころには、ス

ペンサーやミルの著書を教科書として用いた。けれども、経済書を読み、法律書を読み、倫理学や社会学の書を読んでも、専門学としてではなく、慶応義塾はそのころまでは、どこまでも、西洋風にいえば、リベラル・アーツ・カレッジの如き性質の学校であった。

明治19年頃から、慶応義塾に専門学を置こうという議が起り、社中の中でそれを実現しようと動きはじめた。置かねばならない事態を認め、従来のままでは、時流に取り残されかねないことを認めたのであった。ただし、当時流行の法律の一科のみでなく、文学と理財の二科を加えて、三科のわが国最初の総合大学を新設しようというものであった。ひところ一世をリードしていた観のあった慶応義塾が、追う者の立場になっていたのであった。

案ずるのは易く。生むことはむずかしい。つい数年前に、存亡の問題で、大さわぎをしたばかりであった。それなのに、事もあらうに、大学、それも総合制にしようというのであるから、当然財政上の犠牲的大出血を覚悟しなければならぬ。しかし、それを敢えてしたのである。

明治20年秋冬のころ、当時大蔵主税官であった小泉信吉を、慶応義塾総長に迎えることに定めた。これを手はじめに、22年1月、資本金募集を開始、これには10万円ほどの応募があった。同年8月、14年制定の「仮憲法」に代って、新に「慶応義塾規約」を作って、新役員を選び（塾長小泉病氣中、小幡篤次郎代行）、10月にハーバード大学総長エリオットの推薦により、文学、理財、法律の三科の主任教師三名が来着、11月、三科学生、文学20名、理財30名、法律9名の入学を許可し、翌23年1月27日始業式にこぎつけている。

始業式当日の講話の中で、福沢は、慶応義塾における専門学の意義をのべて曰く、わたしは学問は三度のめしより好きだが、学問を人生の第一義のものとは考えないことにしている。何故か。学問は要するに人生にとって手段であるからだ。たしかに、学問知識がないため、足りないために、一身の不利のみか、天下の不幸をひきおこす例は、枚挙にいとまなしで、

人生の不幸をなくし幸を増すには、学問教育の向上の一法あるのみではあるが、学問を唯一無二の人事と思って、学問に押しつぶされ、他を顧りみず凝り固まってはこまる。学問はどこまでも人間のためのものであることを忘れないようにせよ、と人間疎外を警告している。

大学部ができたので、従来のコースは普通部と呼ぶことになった。これはいままで通り手をつけず温存した。正科と別科とがあった。明治31年の学制の大改革で、一貫制の中学校になるまでは、義塾学制の根幹として多数の生徒を収容し、卒業した者は、慶応義塾出身として世に迎えられた。

#### (4) 日清戦争前後は世の変り目—制度の危機

前記のように、明治初年以来のコース、すなわち、普通部は生徒数も多く義塾の根幹で、7年にできた幼稚舎と、23年にできた大学部とは、分枝の如き観があった。3つのコースは相互の間に、縦の連絡や横すべりがなかったわけではないが、並存の形で、会計も独立していた。

ところで、明治も30年頃になると、世の変り目にきた感があった。維新のころ生れたもの、子供であったものが、30になり40の働きざかりになっていた。福沢は明治34年に亡くなったとき、68才であった。いわゆる選手交代の時期がきたのである。人間ばかりではない、制度も学問も変り目にきていたのである。精神だけは別だが。

制度は全体として大整理を施さねばならぬ時期にきていた。時代の変化がそれを要請していた。日清戦争のころ、徴兵猶予に関する法規が、私学には適用されなかったり、地方の中学が整備してきたため、入社生が激減した。ピークの明治23年の675名から、どん底の27年の236名に落ちている。当時は社会の変動が、驚くほど敏感に入社志望者の数にひびくのであった(別表参照)。

明治29年普通部に高等科を新設した。普通部の伝統を拡充強化することによって、窮地から抜け出ようという方策であった。これは塾長小幡と評議員中上川彦次郎の考えの線に沿っていた。



福沢の考えはちがっていた。普通部拡充強化策は、大学部の廃止につながりかねない。10万円の応募資金はすでにこのころ底をつき、次の手を何とかうたねばならないところにきていた。もし、大学部を廃止することになれば、応募した人々に対して申しわけないと、福沢は考え、この際はいっそ思い切って大学部を中心に制度を大整理すべし、と説いた。かくして、一貫制を実施することに落ちついた。

はじめの資本金募集の案を、基本金に改め、30年8月「慶応義塾基本金募集趣旨」を発表した。小幡は塾長を退き、福沢は第一線に立って、塾務を総覧し、改革に募金に、老軀をひっさげて活躍した。そうして一応目鼻がつくと、明治31年4月、若い鎌田栄吉を塾長とし、福沢は社頭、小幡は副社頭となった。5月に一貫制を実施し、幼稚舎（小学校6年）、普通部（中学校5年）、大学部（5年）として新しくスタートした。一貫制は時勢に適合、その後永続きしている。基本金の応募は福沢の逝去のころまでに、40万円近くに達し、その後の慶応義塾の経済を安泰にした。そういうわけで、福沢は一貫制実施後3年目に亡くなったけれど、死後もその先見と思いついた改革のおかげを慶応義塾はながくこうむった。

慶応義塾にはもう一つのなやみが、この期にあった。明治29年11月1日、芝紅葉館に開かれた旧友会の席上の演説で、福沢はこのなやみを、その日集った旧先輩たちに披瀝した。私学においては、経済上の不如意はいかに苦しくとも、堪えて堪えられないことはないが、その気風品格が高尚でなければ、存在理由はなくなり、在っても無きに等しい。気品は私学の生命である。福沢はさらにつづけて、次のようにいう。

慶応義塾は鉄砲州以来今日にいたるまで、固有の気品を、われわれが先輩として維持してきた。しかし、その仲間も次第に世を去り残り少なくなった。残ったわれわれ長老も頭髪に白いものを加えた。われわれの死後も、二世以下に、この気品を引き継いでもらいたいが、どうすればそれができるか。先輩たるわれわれ長老の責任だと思う。これが現在の自分のなや



みである。福沢は「老生の本意は此慶応義塾を単に一処の学塾として甘んずるを得ず。其目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家、処世、立国の本旨を明にして、之を口に言ふのみに非ず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを期する者なれば、今日のこの席の好機会に恰も遺言の如くにして之を諸君に囑托するものなり」といってその演説を結んでいる。60の坂を二つ三つ越した福沢は、死後のことを考えていたのであった。そこでの関心は経済の問題ではなく、気品の問題であったことがわかる。

明治31年5月に第一線を退いた福沢を待っていたものは、脳出血という病気であった。9月に発病して、12月には回復祝賀の集りをもつことができたけれども、その後病を養う生活がつづいた。翌32年11月ころ、福沢の意をうけて、長男一太郎他社中数名のものが編纂に着手し、33年2月11日紀元節の日に脱稿したのが、「修身要領」29か条の独立自尊主義の道德綱要である。これはある意味では、前の演説の趣旨の具現と見ることができる。

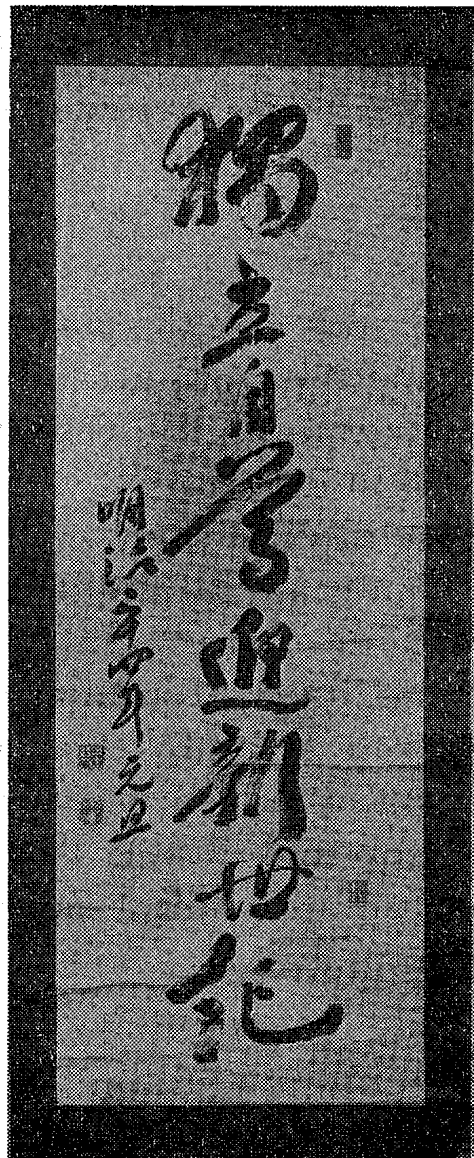
さらに、第三に、慶応義塾の専門学に転機がきていた。明治32年7月、専門学の学者を義塾卒業生中に育てるために、海外留学生派遣を決定し、8月、第一回は堀江帰一、名取和作をアメリカへ、神戸寅次郎、気賀勘重、川合貞一をドイツへ、次いで9月に、青木徹二をドイツへ派遣した。残念なことに、これらの学者が帰朝して、大学部で活躍するのを見ずに、福沢は34年に世を去った。

最後に、福沢の亡くなる一月前に行われた世紀送迎会について述べ、この講話の結びとする。

明治33年12月31日は、19世紀の最後の日であった。この夜、学生主催で世紀送迎会が三田山上に催され、集るもの社頭福沢はじめ500余名、福沢はこの席で「独立自尊迎新世紀」の語を大書して一同に示された（写真参照）。新世紀を迎えるにふさわしい数々の催物に義塾社中の知性と元気を表示した。

明治34年1月25日は、昼間は元気で来客にも会い、散歩もし、夕飯後も学生二名と快談したが、8時ころ倒れて後、俄に脳出血病を発し、再び立たず、10日後の2月3日午後10時逝去した。数え年68歳。法名は大観院独立自尊居士で、小幡篤次郎の撰である。

こうしてみると、福沢は一貫教育制度を作り、基本金を用意し、気品を尚ぶ塾風を遺言し、一応安心して亡くなったように見える。「自伝」の最後の一節に、老余の誓願として、以下の三か条を挙げている。



1. 全国男女の気品を次第に高尚に導いて、真実文明の名に恥ずかしくないようにしたい。
2. 仏法にてもヤソ教にてもいづれにてもよろしい、これを引き立てて、多数の民心を和らげるようにしたい。
3. 大いに金を投じて、有形無形高尚なる学理を研究させるようにしたい。

この三つは、どれを欠いても、人生にしあわせはこない。この三つは揃わなければならないとすれば、一貫教育の目的も方法も、この誓願の中から汲みとれるように思われる。

**A Critical History of the Forty-four Years (1858—1901)  
of Keio Gijuku, the Corporate School**

*Kazuyoshi Nakayama*

For these forty-four years, Keio Gijuku experienced four crises, of which the first one was of learning tradition, the second of school finance, or income and expence, the third of special subjects of study, and the fourth of system of education.

Keio Gijuku was the corporate school, which was incorporated with the young scholars who had the aim to learn the Western sciences.

The members of the school co-operated to break the crises, which otherwise would have forced the school to close.

In the last year (1901) of the critical history of the school, the chief member of the corporation, Yukichi Fukuzawa died, but the foundation was rather safe and remained unmoved during the following forty years after his death.